

大 学 生 の 性 役 割 意 識

——男女間のギャップを中心に——

長 津 美 代 子

(青葉学園短期大学)

平成 3 年 1 月 5 日受理

Attitudes toward Gender Roles of University Students —Focusing on Gaps between Male and Female Students—

Miyoko NAGATSU

Aobagakuen Junior College, Setagaya-ku, Tokyo 154

The purpose of this study is to explore gaps between attitudes toward gender roles of male and female students, by using such criteria as attitudes toward role relationships between male and female, the double standard of sexual morals, men's leadership in dating, and energy allocation to occupation and homemaking after marriage. The survey was conducted in January, 1990 to 735 university students in Tokyo and its outskirts. The major findings are as follows:

(1) ISRO (The Index of Sex-Role Orientation, E.A. Dreyer *et al.*) scores on attitudes toward role relationships between male and female point out that 45% of the female students are innovative type, but about the half of the male students are traditional one.

(2) Compared with female students, male students tend to accept the double standard of sexual morals.

(3) Female students expect that males play leadership roles when they go out together more than male students themselves intend to.

(4) Male students wish to allocate less energy to occupation than their fathers do, and female students hope to allocate less energy to homemaking than their mothers. As a result, the present tendency to give too much attachment to occupation for males and homemaking for females will be relieved in their married life.

(Received January 5, 1991)

Keywords: attitude toward gender role 性役割意識, role relationship between male and female 男女の役割関係, double standard of sexual morals 性モラルの二重基準, man's leadership in dating 男女交際での男性のリーダーシップ, energy allocation to occupation and homemaking 職業と家庭のエネルギー配分.

1. 序 論

近年、働く既婚女性の増加のなかで、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割規範は徐々に弱まってきている。しかし、日本社会における性別役割構造はきわめて重層的で、あらゆる領域に性役割規範が貫徹しているので、性別役割構造が全面的に改変されるのは容易なことではあるまい。性によって果たすべきことが期待されている役割を性役割規範ととらえると、性役割規範は、職業、家庭、地域社会等の領域に次のような形で存在し

ている。「地位が高くて重要な仕事は男、女は補助的な仕事をするのがよい」、「家庭でのリーダーシップは夫、妻はそれについていくのがよい」、「地域社会の団体—たとえば PTA や町内会など—の代表には女性よりも男性をすえるのがよい」など¹⁾。男性と女性が直接かわりあう男女交際や性関係においても、リーダーシップをとるのは男性の役割で女性はそれに従うのがよいとされている。性行動については、男性にはルーズな、女性には厳格な基準が適用されている。またなにかにつけ、男は

男らしく、女は女らしくふるまうことが期待されている。

充実した生き方をする上でこうした性役割規範が障害になることに気づいた女性たちは、これに対して異議申し立てを始めた。1975年の国際婦人年を境にこの動きは活発になり、1980年代の後半ごろからは、男性にとっても性役割規範から自由になることが豊かな人生を送る上で不可欠であるという主張²³⁾もきかれるようになった。女性が伝統的な性役割規範のもとで抑圧されて生きなければならなかったように、男性もまた、男という重い看板を背負って男らしさに束縛されて生きなければならなかったからである。全体としては、伝統的な男役割からの解放に対して現代の日本社会は必ずしも寛容ではないが、女性たちがこれまでの役割関係に強く反対している以上、もう一方の性である男性もそれに応じて変わらざるを得なくなっている。現代は、伝統的*な性役割規範から解放された新しい男女関係の創出が追求されていかなければならない時代、といえよう。

こうした時代の流れのなかで、就職、結婚と人生の重要なできごとをこれから体験していかなければならない若者たちは、どのような性役割規範意識（以下性役割意識という）をもっているのだろうか。本研究では、大学生の性役割意識を以下の諸点からとらえることを目的とした。

① 性役割意識はいろいろな側面からとらえることが可能であるが、ここでは、男女の役割関係のあり方についての意識、性モラルの二重基準の有無、男女交際における男性のリーダーシップに対するこだわりを、男女別に把握する。近年、夫婦の間で妻の意識が急激に変化しており、変わらない夫との間に大きなギャップのあることが問題になっているが、大学生にもそのような男女間のギャップがみられるのかどうかに注目する。

② 男女の役割関係のあり方についての意識は、親の役割関係の影響を受けていることが想定されるので、母親の職業歴との関連をとくに重視する。

③ 性役割意識には変化しやすい側面となかなか変わ

らない側面があると思われる。三つの性役割意識のなかで、どの側面の革新化が最も遅いのかという点についても言及する。

④ 男女の役割関係をエネルギーの配分という面からみると、男性は仕事に女性は家庭に偏りすぎているといわれている。結婚後、仕事、家庭、余暇、社会参加活動の4領域にどのようなエネルギーの配分をしたいと考えているかを両親の現実のエネルギー配分と比較することによって、ある役割を極端に重視する傾向が大学生にもみられるかどうかを明らかにする。さらに、伝統的な性役割規範に対抗したエネルギー配分を志向する、家庭に職業と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたい男子と、職業に家庭と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたい女子の特徴も明らかにしたい。

2. 調査の方法と対象

調査は、知り合いの教員の協力を得て、都内およびその近郊にある四年制の私立大学6校と国立大学4校で実施した。時期は1990年1月である。調査対象となったのは、それらの教員が担当している社会学、家族社会学、生活科学概論などを受講している学生で、授業終了後調査票を配付し10～20分程度で記入してもらい、その場で回収した。留学生、既婚者、未記入の多い者等19票を除く735票を有効とした。

対象者の性別は、男子48.2%、女子51.8%である。学年は1年生が46.5%で最も多く、以下3年生、2年生、4年生の順になっている。年齢は18歳から26歳まで分布しているが、19歳から21歳までで75.6%を占めている。文系と理系にわけると、理系11.7%、文系88.3%で文系の学生が中心である。住まいは自宅が53.7%、アパート・学生寮等が45.9%である。対象者の出身高校の所在地は全国にわたって分布しているが、東京都と神奈川県がとくに多く、関東地域だけで65.8%になる。中・高校が男女共学であるかどうかは性役割意識の形成に及ぼす影響は大きいと思われるが、本対象者の場合、出身中学の91.4%が男女共学である。高校になるとその割合は70.9%に低下している。対象者の家族的背景についてみると、きょうだい数は本人を含めて2人が61.2%で最も多い。父親の平均年齢は52歳、母親は48.5歳である。父親の学歴は大学卒以上が半数、母親は高校卒が半数で最も多いが、短大卒以上も34%を占め、両親の学歴は比較的高い。父親の32.4%は会社の経営者・役員である。母親は7割近くが働いている(表1)。

* 本研究の伝統的ということばは、性によって役割を決めていく態度や考え方を表す場合に用いている。現代の日本では、さまざまな領域において、こうした習慣や慣習が存続している。これに対して、役割を性によってはっきりと区分しないで、出産以外は男女とも同じような役割をこなせるようになることが望ましいという考え方がある。1975年以降強く現れてきた、いわゆるフェミニズムの立場で、こうした態度や考え方を革新的とか平等主義的ということばで表している。

大学生の性役割意識

表 1. 調査対象者の特徴 (%)

(1) 性 別		(2) 学 年					(3) 出身中学および高校は共学か			
男子	女子	1 年	2 年	3 年	4 年	不明	共学校	男子校	女子校	
48.2	51.8	46.5	13.7	30.5	9.0	0.3	中学	91.4	2.2	6.4
							高校	70.8	12.7	16.5

(4) 出身高校の所在地									
東京	神奈川	埼玉	千葉	その他の 関東	中部	関西	北陸・東北・ 北海道	中国・四国・ 九州	外国
28.6	15.5	6.3	8.7	6.7	8.0	5.9	8.1	11.9	0.3

(5) 父親および母親の職業							
	経営者・ 役 員	常勤の 雇用者	パート・ 臨時雇い	自 営・ 家族従業	内 職・ アルバイト	無職	不明
父 親	32.4	51.1	0.6	14.8	0.3	0.7	0.1
母 親	3.0	15.2	27.0	16.3	7.3	31.0	0.1

(1)～(4): $N=735$. (5): 父親の職業は、父はいない 26 名を除く, $N=709$. 母親の職業は、母はいない 6 名を除く, $N=729$.

3. 分析結果

(1) 男女の役割関係のあり方

男女の役割関係のあり方に対する意識を把握するために、Dreyer らが作成した性役割志向性尺度 (The Index of Sex-Role Orientation 略して ISRO) を活用した⁴⁵⁾. これは、家庭の内外における伝統的な習慣や慣例にそった性役割規範の改変や、女性も家庭と職業の両立を通して人間の成長を達成することができるという意識がどの程度あるかをとらえようとしたものである。質問は 16 項目から構成されている (表 2)。回答の選択肢は、「非常に賛成」、「やや賛成」、「どちらでもない」、「やや反対」、「非常に反対」の 5 段階で、それぞれの回答に 1 点から 5 点までの点数を与えた。ただし、4, 6, 8, 10, 13, 14 は配点を逆転させている。得点が 5 点に近いほど革新的、1 点に近いほど伝統的性役割意識をもっていることを表している。

いずれの項目においても女子の得点のほうが高く、女子のほうが伝統的性役割規範からの自由度が高いことを示している。項目別にみると、男子では「男でも女でも、同じ仕事に対しては同じ賃金が支払われるべきだ」の得点が 4.4 で最も高く、次が「女性にも男性とまったく等しい雇用の機会が与えられるべきである」(4.0) となっている。この二つの項目は、女子にとっても得点の高い上位二つを占めており、雇用機会の均等と同一労働同一賃金については男女で差別があってはならないとする意

識が男女ともに強い。また、伝統的意識の強い 2 項目も男女ともに同じである。「肉体的な重労働が女性に向かないように、精神的、感情的特質ゆえに女性に向かない仕事もいろいろある」と「母親が働いていると、就学前の児童には害のおよぶことがある」は、男女ともに 2 点台で、女子の場合 2 点台はこの 2 項目のみである。性によって向き不向きの仕事があるという男女特性論と、子どもが小さいときは母の手でという母性神話は、若い世代にかなり強く内面化されている。男子の場合は、他にも 2 点台の項目が四つある。「子どもを生むのが女の証し」、「特別なケースを除き、妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼ぐべきだ」、「重要な仕事を数々抱えていても、女性の本来いるべき場所は家庭」、「女性は自分のキャリアを考えるよりも、まず育児と家事を自分の仕事と心得るべきだ」、である。女子の場合、これらの項目の得点は 3.2 から 3.8 の間に分布している。家事・育児は女の仕事という考え方が男子には強くあり、女子との間かなりギャップのあることが理解できる。雇用機会や賃金は男女平等であるべきだが、家事・育児責任はやはり女にある、という男子の考え方は、働く既婚女性に二重の負担を強いることにつながっていく。

性役割志向性を全体的にとらえ、それがどのような変数の影響を受けているかを明らかにするために、16 項目を合計して ISRO 得点とした。得点は 22 点から 80 点までの間に分布していた。全体が 3 等分になるように区

表 2. ISRO の男女別各項目得点

	男子	女子	全体
1. 女性は家庭の管理にあたるべきであり、国家の管理運営は男性に任せておくべきだ。	3.4⑤	4.2③	3.8
2. 女性がキャリアを求めるならば、大方の女性は子どもを持つべきではない。	3.5④	4.1④	3.8
3. 母親が働いていると、就学前の児童には害のおよぶことがある。	2.4⑮	2.6⑮	2.5
4. 仕事を持つということは、自分自身の人生を生きているということだ。	3.3⑦	3.7⑦	3.5
5. 子どもを生むことが女性の証である。	2.8⑫	3.2⑫	3.0
6. キャリアを求める女性にとって、出産や育児がその障害となることがあってはならない。	3.4⑤	3.7⑦	3.6
7. 特別なケースを除き、妻が料理や掃除をやり、夫が家族のために金を稼いでくれるべきだ。	2.8⑫	3.8⑥	3.3
8. 女性にも男性と全く等しい雇用の機会が与えられるべきである。	4.0②	4.4②	4.2
9. 女性は家において、子どもの世話をしている方がずっと幸福である。	3.3⑦	3.7⑦	3.5
10. 働く母親でも、働いていない母親と全く同じように、子どもとの間にあたたかな安定した関係を確立することはできる。	3.6③	4.1④	3.9
11. 女性は自分のキャリアを考えるよりも、まず育児と家事を自分の仕事であると心得るべきである。	2.9⑪	3.6⑫	3.3
12. 重要な仕事を数々抱えていても、やはり女性の本来いるべき場所は家庭なのである。	2.8⑫	3.5⑬	3.2
13. 私は、夫が家庭の雑用をうけもち、妻が家計をまかなってほしいと思う。	3.1⑩	3.7⑦	3.4
14. 男でも女でも、同じ仕事に対しては同じ賃金（報酬）が支払われるべきだ。	4.4①	4.7①	4.5
15. 私は、妻に働かせて自分は家で子どもの世話をするような男性を尊敬することはできない。	3.2⑨	3.7⑦	3.4
16. 肉体的な重労働が女性に向かないように、精神的、感情的特質ゆえに女性に向かない仕事もいろいろあるということを、女性自身が自覚すべきである。	2.0⑮	2.3⑮	2.2

E.A. Dreyer らが開発した ISRO (The Index of Sex-Role Orientation) による。日本語の質問文は、文献 5) に掲載されたものを使用した。回答の選択肢は「非常に賛成」、「やや賛成」、「どちらでもない」、「やや反対」、「非常に反対」の 5 段階で、得点が 5 点に近いほど革新的、1 点に近いほど伝統的性役割意識をもっていることを示している。いずれの項目も $p < 0.05$ で男女間の有意差が確認された。○内の番号は、得点の高い項目から順につけている。

分し、50 点までを伝統型、51 点から 60 点までを中間型、61 点以上を革新型と名づけた^{**}。伝統型は、全体として「男は仕事、女は家事・育児」という性役割規範を支持し肯定する態度をもっている。革新型は、伝統的な性役割規範に否定的で、男女平等意識が強い。中間型には、性役割規範に対する肯否の程度が中間的な場合と、ある伝統的な性役割規範の項目には否定的であるが、他のそうした項目には肯定的であるなど、項目によって肯否の態度が異なる場合とが含まれている。伝統的とも革新的とも認定しがたいタイプである。これらの 3 パターンを男女別に見ると、男子の約半数は伝統型で革新型は 17.7% にすぎず、逆に女子では革新型が 45.1% にもなり、伝統型は 2 割に満たない (図 1)。全体的にとらえることによって、男子は伝統的性役割志向性、女子は革新的性役割志向性をもっている者が多いという、男女間のギャップがきわめてクリアになった。

性役割意識の形成には家族、学校教育、マスメディア等さまざまな要因が関与していると思われるが、なかでも家族の影響力は大きいものがある。子どもは家庭生活を通して、父親や母親から男女の役割を自然に学び取っていく。このようにして身につけたものはなかなか変わりにくい。幼いころから母親が就業している家庭と専業主婦の家庭で育った子どもでは、男女の役割に対する認識に差があり、前者のほうが「男は仕事、女は家事・育児」という伝統的な性役割意識は弱いことが予測される。母親の職業歴は、対象者の発達段階の六つの時点 (幼児のころ、小学校低学年のころ、小学校高学年のころ、中学生のころ、高校生のころ、現在) における母親の就労の有無を組み合わせることによって、次の四つのパターンに分けた。

継続就業型：すべての発達段階において母親は就業している (31.6%)

再就職型：小学校低学年以降のどの段階でか仕事に就

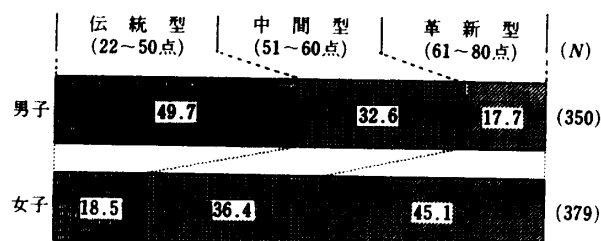


図 1. 男女別 ISRO パターン (%)

$p < 0.05$, CrV = 0.36403. 不明 6 名を除く。

^{**} 東清和らの「性役割志向性 (ISRO) による測定と診断」⁶⁾ を参考に分類した。

大学生の性役割意識

き、現在まで続けている (33.1%)

その他の就業型：発達段階の六つの時点のどこかで一度は就業し、止めた経験をもつ (15.3%)。70.9% は現在無職である

専業主婦型：すべての発達段階において母親は無職である (20.0%)

これらの職業歴と ISRO パターンの間には、女子の場合のみ有意差が認められた (図 2)。革新型の割合は母親が継続就業型で最も高く、以下再就職型、専業主婦型、その他の就業型の順になっている。それに対して、伝統型の割合は母親が専業主婦型で最も高く、その他の就業型、再就職型と続き、継続就業型で最も少ない。すなわち、母親が職業とどのようにかかわって生きてきたかが、娘の性役割志向性の形成に大きな影響を与えていることが明らかになった。また女子は、学年が上がるにつれて革新型の割合が増えているが、男子ではそのような傾向は確認されなかった (図 3)。このような結果が現れたのは、女子の場合、大学生活に慣れるに伴い、女の

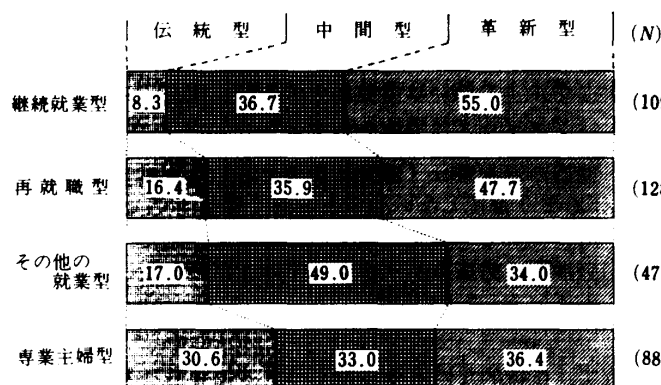


図 2. 母親の職業歴別 ISRO パターン (%) —女子—
 $p < 0.05$, $CrV = 0.17078$. 母親はいないおよび不明の 13 名を除く。母親のデータは調査対象者から得たものである。

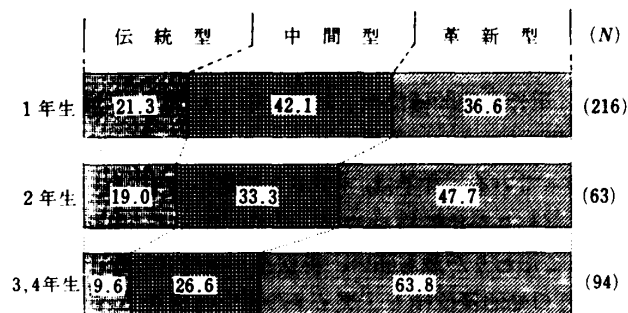


図 3. 学年別 ISRO パターン (%) —女子—
 $p < 0.05$, $CrV = 0.16339$. 不明 8 名を除く。

役割を家事・育児に拘束する社会規範が将来の自己実現を妨げる壁になっていることを認識する機会が増えるためではないかと思われる。高校のとき男女共学であったかどうか、および父親の学歴と ISRO パターンの間には男女とも有意差が確認されなかった。しかし、母親の学歴との間には女子の場合にのみ有意差が確認され ($p < 0.05$, $CrV = 0.11707$)、革新型は母親が低・中学歴のほうに多くなっている。これは、低・中学歴では継続就業型の割合が高く、高学歴では専業主婦型の割合が高いという、母親の職業歴が反映した結果であろう ($p < 0.05$, $CrV = 0.24631$)。

(2) 性モラルの二重基準

女性には厳しく男性にはルーズな性モラルの二重基準が一般庶民にまで浸透するようになったのは、「家」制度成立以降のことである。天皇制国家を支える基礎として 1898 (明治 31) 年に「家」制度が確立し、武士や町人の上層階級の儒教的な家族道徳を一般庶民も守ることが義務づけられた⁷⁾。その「家」を内側から支える役割を果たしたのが良妻賢母主義であった。「夫に対しては貞節を尽くし、夫の両親には真の父母のように交わり、跡継ぎを生んで家の存続と安定をはかる」ことが理想的 (109) 女性とされ、教育を通して徹底して教えこまれた⁸⁾。結婚前の男女の自由な交流は禁じられ、結婚にさいしては処女性が尊重され、離婚した女性に対しては「出戻り」というレッテルがはられ、夫の死亡後は「二夫にまみえず」生きていくことがよしとされた⁹⁾。すなわち、女性の性は徹底して抑圧されたのである。一方男性には、性的遊び場としての遊郭があり、愛人を持つことは「男の甲斐性」として容認された¹⁰⁾。こうした性モラルの二重基準は、戦後の日本国憲法の制定や現行民法の施行によって、制度的基盤を失うが、いったん人々の意識のなかに内面化された考え方はなかなか変わりにくいと思われる。

本調査では、配偶者以外との婚前交渉、婚外交渉、配偶者に先立たれた高齢者の結婚を、夫と妻それぞれの場合についてどの程度容認できるかを 4 段階に分けて聞いた。項目別にみてもっとも許容度が高いのは、「配偶者に先立たれた高齢者の結婚」で、許容度が低いのは「婚外交渉」であった。わが国が一夫一婦制であること、また異性愛には独占欲や排他性が伴うことなどから判断すると、婚外交渉に対する許容度が低いのは当然の結果といえよう。男女差が確認された項目は、「夫の結婚前における配偶者以外との性関係」(表 3 の 1) と「夫の婚外交渉」(表 3 の 3) であった。いずれも男子の許容度

表 3. 性モラルの二重基準・男女別各項目得点

	男子	女子	全体
1. 結婚前、夫が他の女性と性関係をもったことがある*	3.4	3.2	3.3
2. 結婚前、妻が他の男性と性関係をもったことがある。	2.9	3.0	3.0
3. 夫が妻以外の女性と性関係をもつ(浮気をする)*	2.1	1.6	1.8
4. 妻が夫以外の男性と性関係をもつ(浮気をする)	1.6	1.6	1.6
5. 妻に先立たれた60代の夫が再婚する	3.5	3.5	3.5
6. 夫に先立たれた60代の妻が再婚する	3.5	3.5	3.5

回答の選択肢は「容認できる」、「まあ容認できる」、「あまり容認できない」、「容認できない」の4段階。それぞれに4, 3, 2, 1の各得点を与えた。得点が高いほど許容度が高いことを示している。* $p < 0.05$

のほうが高くなっている。ところで、ここで重視したいのは、個人がもつ性モラルの二重基準である。三つの領域で夫に許容される度合の得点(表6の1, 3, 5)の総和と妻に許容される度合の得点(表6の2, 4, 6)の総和の差を、その人の二重基準得点とした¹¹⁾。マイナス得点は妻に許容される度合のほうが高いこと、0は二重基準がないこと、プラス得点は夫に許容される度合のほうが高いことを表している。得点は、-2から+9までの間に分布していた。0点が最も多く65.2%、-1点と-2点が2.5%、1点から9点までが30.8%であった。-1と-2は二重基準はあっても伝統的ではないので、0と合わせて二重基準なしとし、プラス得点の者を二重基準ありとした。男女別にみると、女子の80.4%には二重基準はないが、男子のその割合は57.1%にすぎない。男子の42.9%は、妻よりも夫に対する許容度が高い性モラルの二重基準をもっている(図4)。また、女子の場合は、学年が上がるにつれて二重基準なしの割合が高くなるが、男子の場合はその逆で、二重基準ありの割合が高くなっている(図5)。男子は学年が進むにつ

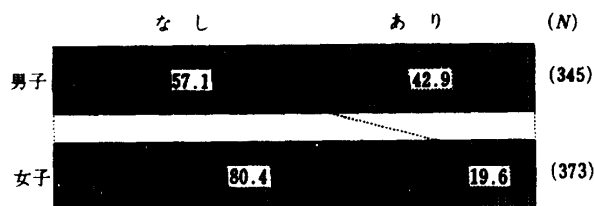


図 4. 男女別性モラルの二重基準の有無 (%)
 $p < 0.05$, $\phi = 0.25250$. 不明 17 名を除く。

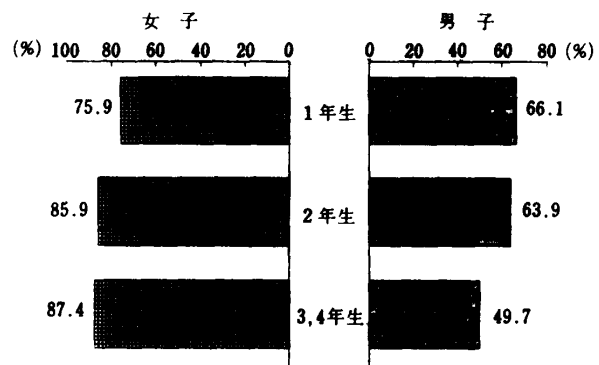


図 5. 学年別性モラルの二重基準「なし」の割合 (%)
 男子: $p < 0.05$, $CrV = 0.16067$. 女子: $p < 0.05$, $CrV = 0.13625$. 男女とも不明は除く。二重基準ありの割合は、各学年とも100%から「なし」の割合を引いた値である。

表 4. 男女交際における男性のリーダーシップに対するこだわり・男女別各項目得点

	男子	女子	総合
1. デイトでは男性がリーダーシップをとる	2.6	2.7	2.6
2. 男性の方が知的に優れている*	1.8	2.6	2.2
3. デイトの誘いは男性からする*	2.1	2.3	2.2
4. プロポーズは男性からする*	2.5	2.9	2.7

回答の選択肢は「非常に重視する」、「まあ重視する」、「あまり重視しない」、「まったく重視しない」の4段階。それぞれに4, 3, 2, 1の各得点を与えた。得点が低いほど、男性のリーダーシップにこだわらないことを示している。* $p < 0.05$

れて、伝統的な性モラルをもつようになることが示唆された。

(3) 男女交際における男性のリーダーシップ

わが国では、恋愛、結婚における女性の受け身規範が強いといわれている。東京都の調査¹²⁾によれば、「結婚の申し込みを女性からする」ことに未婚女性の7割近くが抵抗を示している。本研究では、男女交際における男性のリーダーシップを4項目で把握した(表4)。男子は、「男性の知的優位性」に対するこだわりが最も少なく、「デイトにおける男性のリーダーシップ」に最もこだわっている。女子は、「デイトの誘いは男性」に対するこだわりが比較的少なく、「プロポーズは男性」に対するこだわりが最も強い。男女差が確認された項目は、「男性の知的優位性」、「デイトの誘いは男性から」、「プロポーズは男性から」の3項目で、いずれも男子の得点のほうが低く、リーダーシップに対するこだわりは男性

大学生の性役割意識

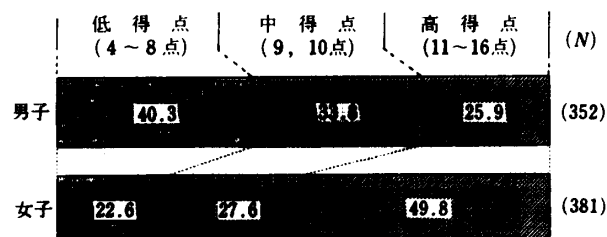


図 6. 男女別男女交際における男性のリーダーシップに対するこだわり得点 (%)

$p < 0.05$, CrV = 0.25706. 不明 2 名を除く。

のほうが少ない。

男女交際における男性のリーダーシップ意識を全体的に把握するために、4 項目の得点を合計し、男性のリーダーシップに対するこだわり得点とした。全体がほぼ均等に 3 区分されるように、4~8 点を低得点群、9, 10 点を中得点群、11~16 点を高得点群として、男女別比較を行った。結果は図 6 に示すとおりで、男子は低得点群が 40.3% と最も多いのに対し、女子は高得点群に約半数が集中している。男女交際における男性の優位性やリーダーシップに対する女子のこだわりは、男子が意識している以上に強く、男女間のギャップは大きいことが明らかになった。女子の受け身規範の強さは、女子にとっては異性交際を通じて豊かな人間関係を育んでいく機会を狭めることになり、常にリーダーシップを発揮しなければならない立場におかれる男性にとっては、かなりの煩わしさやストレスを感じるようになる。

(4) 三側面における革新化の状況

女子の場合、「男は仕事、女は家事・育児」という二分法的性役割観から派生してくる社会や家庭における役割関係のあり方、性モラルの二重基準については、男子よりも革新化の度合いが大きい。しかし、男女交際においては、男性に対する依存意識が強く男性の優位性を期待している。一方男子は、男女交際における男性のリーダーシップにはあまりこだわっていないが、男女の役割関係のあり方や性モラルの二重基準については、かなり伝統的で女子よりも革新化が遅い。

(5) 結婚後のエネルギー配分

父母が職業、家庭、余暇、社会参加の 4 領域にどのようにエネルギーを振り分けているのかについて、4 領域の合計が 10 になるように調査対象者に答えてもらった¹³⁾。対象者の認知によれば、父親は職業に 5.9 と最も多くのエネルギーを注ぎ、家庭は 2.0、余暇 1.6 で、社会参加にはほとんどエネルギーが振り向けられていない。母親は、家庭に 5.1 と最も多くのエネルギーを注ぎ、職業は

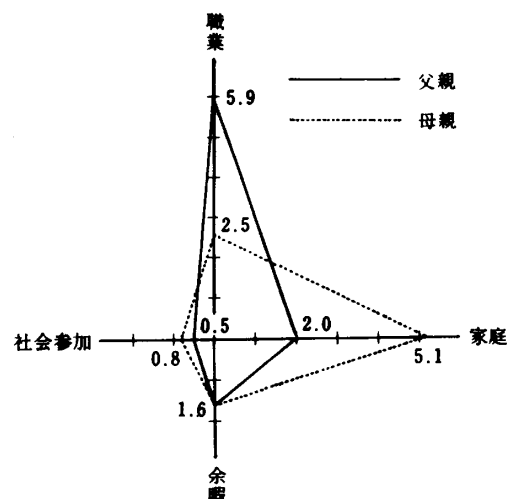
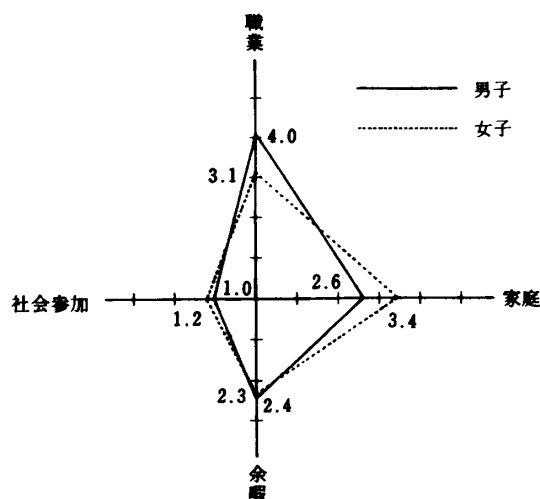


図 7-1. 父親と母親のエネルギー配分の現状

調査対象者が認知している父母のエネルギー配分の現状である。4 領域の合計は 10 になる。

図 7-2. 男女別結婚後のエネルギー配分についての意識
4 領域の合計は 10 になる。

2.5、余暇 1.6 で、やはり社会参加にふり向けられているエネルギーは少ない(図 7-1)。父親は職業重視、母親は家庭重視の傾向が明瞭に現れている。父親と母親を比べると、母親が家庭に注ぐエネルギー (5.1) よりも父親が職業に注ぐエネルギー (5.9) のほうが多く、父親の職業への偏重は顕著である。

では対象者自身は、将来結婚して家庭をもった場合どのようにエネルギーを配分したいと考えているのだろうか。男子は、職業 4.0、家庭 2.6、余暇 2.3、社会参加 1.2 となっており、父親よりも職業に注ぐエネルギーを減らし、その分をその他の領域に少しずつ分散したいと

表 5. 職業と家庭のエネルギー配分の状況 (%)

	職業>家庭	職業=家庭	職業<家庭	計
父親	91.3	6.7	2.0	100(701)
母親	19.6	14.6	65.8	100(728)
男子	66.1	23.7	10.2	100(354)
女子	29.4	32.3	38.3	100(381)

父親あるいは母親がいない、および不明のケースは除く。父親と母親の場合は、調査対象者が認知している父母のエネルギー配分の現状である。男女の場合は、結婚後のエネルギー配分についての対象者の意識を男女別に表したものである。

考えている。女子の場合も、家庭 3.4, 職業 3.1, 余暇 2.4, 社会参加 1.2 で、母親よりも家庭に注ぐエネルギーを減らし、その分をその他の領域に少しずつ分散したいと考えている(図 7-2)。その結果、親世代にみられたある役割を極端に重視する傾向は、子世代においては緩和されることが予測される。

次に、4 領域のうち職業と家庭をとりあげ、そのどちらに多くエネルギーを配分しているかという視点から分析してみよう。職業と家庭のエネルギー配分のしかたには、性役割意識が投影していると思われるからである。配分パターンを職業のほうにエネルギーを多く注いでいるタイプ、職業と家庭のエネルギー配分が同じタイプ、家庭のほうにエネルギーを多く注いでいるタイプの三つに分類すると、父親は職業>家庭型が 9 割以上と圧倒的に多く、母親は父親ほど高い割合ではないが、それとは逆の職業<家庭型が最も多くなっている。それに対して息子の男子学生の意識では、職業>家庭型が 66.1% に減り、他の 2 タイプの割合が増えている。また、女子の場合も母親世代に比べて職業<家庭型が減り、三つのタイプにはほぼ均等に分散している(表 5)。ところで、「男は仕事、女は家庭を重視すべき」という性役割規範が強い社会のなかで、家庭に職業と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたいという男子、職業に家庭と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたいという女子は、どのような特徴をもっているのだろうか。まず女子についてみると、当然のことではあるが、自分が歩きたいライフコースの影響を受けている。希望するライフコースが継続就業型では、職業>家庭型と職業=家庭型で 8 割以上を占め、中断再就職型や結婚・出産退職型と比べてその割合がきわめて高い(図 8)。また、母親のエネルギー配分の現状とも関連があり、母親が職業>家庭型では、その娘の意識も職業>家庭型が最も多い。母親が職業=家庭型の

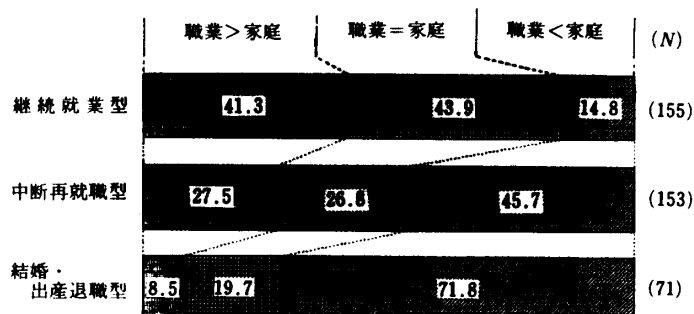


図 8. 女子の将来の希望コース別結婚後のエネルギー配分についての意識 (%)

$p < 0.05$, CrV = 0.31482. 結婚・出産退職型には、非就業型(仕事には就きたくない)の 8 名が含まれている。不明 7 名を除く。

場合は娘も職業=家庭型、母親が職業<家庭型の場合は娘も職業<家庭型が最も多くなっている(表 6)。すなわち、母親のエネルギー配分の現状と娘の結婚後のエネルギー配分についての意識は対応関係にあり、母親は女子に対して、生き方の具体的モデルを提供しているといえる。さらに、性役割指向性と配分パターンとの関連も認められ、伝統型と中間型では職業<家庭型が多く、革新型では職業=家庭型が最も多く、次いで職業>家庭型が多くなっている($p < 0.05$, CrV = 0.24826)。

一方、父親のエネルギー配分の現状と息子の結婚後のエネルギー配分についての意識との関連は、認められなかった。また、男子の性役割指向性と配分パターンの関連も確認されなかった。職業=家庭型か職業<家庭型のエネルギー配分をしたいと考えている男子の割合が父親の現実のそのパターンの 3 倍近くになっていることは、「家庭を妻に任せて男は仕事に専念」という父親世代の生き方が揺らぎ始めたことを示唆している。しかし今回の調査では、こうした男子グループと関連した有意な変数をとらえることができなかった。

4. 結論と考察

以上の分析結果から得られた知見をまとめると次のようになる。

① 役割関係については、雇用機会や賃金は平等であるべきだという意識は男女共に強いが、「家事・育児責任は女」に関連した質問項目では、男子はかなり伝統的である。男女の役割関係についての態度を全体的にとらえた ISRO 得点でみると、男女間のギャップはきわめて鮮明で、女子の 45% が革新型であるのに対し、男子は約半数が伝統型である。

大学生の性役割意識

表 6. 母親の職業と家庭のエネルギー配分の現状別女子の結婚後のエネルギー配分についての意識 (%)

	女 子			計
	職業>家庭	職業=家庭	職業<家庭	
母 親				
職業>家庭	44.9	31.9	23.2	100(69)
職業=家庭	31.7	48.3	20.0	100(60)
職業<家庭	24.2	29.0	46.8	100(248)
計	29.2	32.6	38.2	100(377)

$p>0.05$, CrV=0.19161. 母親はいないおよび不明4名を除く. 表側は, 女子が認知している母親のエネルギー配分の現状, 表頭は, 結婚後のエネルギー配分についての女子の意識を表している.

② 性モラルの二重基準については, 女子は二重基準なしが80%近くを占めているのに対し, 男子は43%が二重基準をもっている.

③ 男女交際における男性のリーダーシップに対するこだわり得点は, 女子のほうが高い. 女子の半数が高得点群にいたるのに対し, 男子は低得点群に約4割と最も多くの者が集まっている.

④ 結婚後のエネルギー配分については, 父親が職業重視, 母親が家庭重視であるのに対し, 男子の場合は, 父親よりも職業に費やすエネルギーを減らし, その分を他の領域に少しずつ分散したい意向がみられる. 女子の場合も, 母親よりも家庭に費やすエネルギーを減らし, その分を他の領域に少しずつ分散したいと考えている. 職業と家庭の関連については, 家庭に職業と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたいという, 伝統的な性別役割構造に揺さぶりをかけている男子が34%出現している. 一方, 職業に家庭と同じかそれ以上にエネルギーを注ぎたいという女子は, 男子以上に多く6割以上になっている.

⑤ 男女の役割関係や家庭と職業のエネルギー配分のしかたに対する意識は, 女子の場合, 母親の影響力が大きい. 前者は母親の職業歴と, 後者の場合は母親のエネルギー配分の現状と強い関連が認められた. しかし男子については, それらと関連する有意な変数を見いだすことができなかった.

以上の調査知見からいくつかの考察を試みたい. 第一は, 二分法的な性別役割分業を基本にした伝統的な分業規範に反対し, 男女平等の性モラルをもつ女子が, 男女交際においては受け身規範が強く男性にリーダーシップを期待しているという事実についてである. 異性交際において, 青年男女は, 愛や夢を語り, 男女の役割を学習

していく. 自己を開示し親密な交際へと発展し, 配偶者選択にむすびつく場合もありうる. だからこそ男女が平等にかかわりあえる異性交際でありたい. ところが, そうした場で男性のリーダーシップを期待しているということは, 男と女の関係では, 女性自らが自己を依存する存在と位置づけていることを示している. しかし, 男子は女子が意識するほどリーダーシップにこだわっていないので, 男子はリーダーシップを発揮せず頼りない, という女子の評価が生まれることにもなりかねない. リーダーシップや依存性は性差ではなく個人差の側面が大きいという視点に立てば, 男女交際で男性をリードする女子がいてもおかしくはないし, どちらがリードするかにはこだわらないという女子がもっといてもいいはずである. 二分法的な性役割規範のあり方は, 異性交際の分野においても問い直されなければならない.

第二は, 男女の役割関係のあり方に対する意識の男女間ギャップの問題である. 家事・育児は女の役割という考え方に反対し, 職業と家庭の両立を志向する女子と, 家事・育児は女の仕事という考え方にこだわる男子は, 将来, どのような折り合いをつけることになるのだろうか. 結婚は同一世代どうして行われる割合が高い¹⁴⁾ので, 彼らは早晩この問題と向き合うことになる. 予測される方向としては, ①男子が女子の考えに近づく, ②女子が男子の考えを受け入れる, ③職業のために女子が結婚を延期するかあるいはしない, の三つがある. 養育過程で形成された意識が変化するのは容易なことではないので, 恋愛中に女子がよほど強く働きかけないかぎり, ①は望めないだろう. ただし, 結婚当初は共働きに協力的でなかった夫が, 子供ができてから妻の就業を肯定的にとらえ, 家事分担をするようになった例はかなりある¹⁵⁾. 男性中心の社会構造の中では, ②の折り合いのつけ方

が最も多いのではないかと思われる。著者はある4年制の大学で「女性と家族」に関するゼミを担当しているが、学生に将来歩きたいコースを尋ねると、3分の2までが「女性の能力が男性よりも劣るとは思えないし、結婚後も働きたいと思うが、結局は夫の状況による」と答える。伝統的な男性と、女性が働き続ける体制が整っていないという二重の壁に阻まれて、大学時代にもついていた意識を修正していくことになるのである。一方、キャリアを志向したり職業に専念したい女性では、③を選択する者が増えている。1989年の合計特殊出生率（女性が一生のうちに子供を生む数）は史上最低の1.57と発表され、大きなショックを与えた。その主な原因は、いわゆる結婚適齢期にあたる女性の未婚率が高くなっていることにある¹⁶⁾。仕事をもった未婚女性たちが結婚を差し控えている。そこには、家庭をもてば仕事が十分にできないという意識が働いているものと思われる。また、妥協の産物として②を選択したとしても、後悔や悩みは尽きないだろう。女性が結婚しても働き続けられる条件の整備とともに、パートナーとしての男性の意識変革が急務である。

第三は、男子の役割意識の形成が女子ほど母親の影響を受けていない点である。こうした結果は本研究ばかりでなく、共働き研究のなかにも、「母親が共働きの娘の多くは共働きをしたいと答えるが、その息子は共働きを望まない者が多い」という知見¹⁷⁾¹⁸⁾がみられる。このような結果が現れているのにはいくつかの理由が考えられる。一つは、母親が男子に対して伝統的な性別分業型の対応をしているのではないかということである。著者が勤務校の短大生に身のまわりにある性差別について書かせたところ、門限時間と家事分担が兄や弟に比べて不平等である、ということを指摘した者が多かった。また、「共働き家族では、女子は家事をよく手伝うが男子はそうではない」という研究結果¹⁹⁾もある。こうした結果から判断すると、母親が働くことの協力体制を女子にのみ求め、男は家事をしなくてもよいと男子をそこから排除し、伝統的な位置においてしまっていることが想像できる。二つ目は、男子のモデルとなる父親がどのような性別役割意識をもっているかに関連する。共働き家族において、母親が就業することを肯定的に受けとめ、職業と同じように子育てや家事を人間が生きていくためのあたりまえの営為としてとらえている場合は、男子の考え方が伝統的になることはないだろう。しかし現在の社会体制のもとでは、労働時間が長く、特殊な職業でないかぎり父親はそのような意識をもてず、二重負担のもとで働く

母親との間に緊張関係が生ずることになりやすい。こうした両親のもとで成長した男子は、自分にとって都合のよい伝統的な分業意識をもつようになるのではないかと思われる。三つ目は、男子は社会規範を受容しやすいことに関連している。子供は成長とともに自分の家庭を他の家庭との関連で見えるようになる。また、さまざまなマスメディアにも接するようになる。その結果、現代の社会が男性中心の社会構造であることを理解するようになる。学年が上がるにしたがって、性モラルの二重基準を受容する男子学生が増えているという本研究の結果や、「男子は、学年が上がるにつれて職業を性によるステレオタイプで判断する傾向が強い」という研究結果²⁰⁾は、男子が年齢とともに伝統的な社会規範を身につけていくことを示している。親の働きかけが欠如していたり、支え合う体制が形成されておらず、人間関係が緊張にみちた共働き家族であれば、男子は社会規範と抵触することの少ない伝統的な性別役割意識を形成することになりやすいと思われる。

父親を調査の対象にすることがむずかしいということもあって、男子の性別役割意識形成のプロセスを対象にした実証研究はまだないようである。したがって、既述した男子の性別役割意識の形成についての論述は、仮説の域をでていない。これからの検証課題である。

調査にご協力くださいました池岡義孝、岡村清子、川崎末美、高橋正人、樽川典子、野田陽子、藤村正之、宮本みち子、渡辺秀樹の各氏に心よりお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 袖井孝子、矢野眞和編：現在女性の地位、勁草書房、東京、160～166（1987）
- 2) 渡辺恒夫：脱男性の時代、勁草書房、東京、18～21（1986）
- 3) 鹿嶋 敬：男と女 変わる力学、岩波書店、東京、217～221（1989）
- 4) Dreyer, E.A., Woods, N.F. and James, S.A.: *Sex Role*, 7, 173 (1981)
- 5) 東 清和、小倉千加子：性別役割の心理、大日本図書、東京、160～161（1984）
- 6) 東京都生活文化局：女性問題研修プログラム開発報告書、東京都生活文化局婦人少年部婦人計画課、東京、78～79（1990）
- 7) 有地 亨：明治民法と「家」の再編成、講座家族8（青山道夫他編）、弘文堂、東京、50～53（1974）
- 8) 脇田晴子、林 玲子、永原和子編：日本女性史、吉川弘文館、東京、202～210（1987）
- 9) 野田愛子編：離婚を考える、有斐閣、東京、39（1980）
- 10) 祖父江孝男：性の比較文化（ジュリスト増刊総合特

大学生の性役割意識

- 集, 人間の性), 有斐閣, 東京, 68 (1982)
- 11) 山本祥子, 本村 汎: 大阪市立大生活科学部紀要, 34, 423 (1986)
 - 12) 東京都生活文化局: 若い世代の男女平等に関する調査, 東京都生活文化局婦人少年部婦人計画課, 東京, 177 (1988)
 - 13) 東京都生活文化局: 女性の地位指標に関する調査報告書 (中間報告), 東京都生活文化局企画部, 東京, 120~121 (1981)
 - 14) 森岡清美, 望月 嵩: 改訂版 新しい家族社会学, 培風館, 東京, 49 (1988)
 - 15) 日本経済新聞社: 日本経済新聞夕刊, 21世紀型亭主像 (「共働きの夫調査」からの予測), 12月26日号 (1990)
 - 16) 岡崎陽一: 家族のゆくえ, 東京大学出版会, 東京, 13 (1990)
 - 17) 岩男寿美子, 杉山明子: 働く母親の時代, 日本放送出版協会, 東京, 50 (1984)
 - 18) 日本有職婦人クラブ連合会: 母親の就労と家庭教育に関する調査, 日本有職婦人クラブ連合会, 浦和市, 80~81 (1981)
 - 19) 岩男寿美子, 杉山明子: 働く母親の時代, 日本放送出版協会, 東京, 38~40 (1984)
 - 20) 藤原純子: 家政誌, 32, 123 (1981)